

## 現代民俗学の課題

古家信平\*

FURUIE Shimpei

### Some Tasks of the Society of Living Folklore

The first task confronting the Society of Living Folklore is to challenge the arguments of our predecessors in conventional folklore studies in order to establish new theories. In other words, we should commit ourselves to sharpening our sensitivities. Secondly, we must verbalize things that have been considered too common-sense to explain, deepen dialogues with scholars in other academic fields, and make our studies substantial in order to lead to open discussions. Thirdly, considering the historical background of Japan, which has long been influenced by China, the hegemonic nation in Asia, we should grasp Japan's folklore and internationalize it to make it possible for us to conduct exchanges with scholars in Western folklore studies.

キーワード：現代民俗学 先鋭化 実質化 国際化 漢化

現代民俗学会の発足に当たり、この会の名称とした「現代民俗学」の課題について述べることにしたい。

名称とした「現代民俗学」は、「現代の民俗」を研究対象とするという意味で名乗りをあげたというよりも、今日の民俗学としての理念や方法という点に重きをおいたものである。理念と方法は、時代の制約を受けるものである。戦後、民俗学が大学に講座を開設されると、かつての「野の学問」であることからアカデミズムの中に地位を確立することを目指すようになり、その理念と方法はそれに適うものへと変わらなければならなかった。戦前のある時期の民俗学は、経世済民の学という性格を持っていたのに対して、20世紀の終わりころの民俗学はそうした性格を失い、実証科学に徹し全国からの資料収集と類型化による比較研究を方法とするものとなった。福田アジオ氏はこのような変化により民俗学の研究が社会に何かを主張することもなく、形骸化したとし、その理由としてアカデミックな学問になるために形式を整え、「客観主義」に陥ったか

---

\* 筑波大学大学院人文社会科学研究所

らだと、20年前に主張している。これは1986年に書かれた論文であるが、そこで批判的に扱われているアカデミックな学問たらんとして整えた形式には、1972年に完成した『日本民俗事典』、1974年の『民俗調査ハンドブック』、1974～5年にはリーディングスの『現代日本民俗学1、2巻』、1978年の『民俗研究ハンドブック』、1980年の『日本民俗学文献総目録』、1980年の『民俗学文献解題』、1983年の『民俗学概論』などがあり、1972年から1983年までのわずか10年ほどの間にそれらを整備したことは、アカデミズムの中にしっかりと地歩を築こうとした意欲なしにはできないことであった。形式を完備することは必要なことであって、こうした事業のすべてにかかわってきた福田氏の寄与は非常に大きかったと言える。

ここに引用した福田氏の論文のタイトルは「初期柳田国男の研究と現代民俗学」となっており、その当時の現代民俗学としての主張をまとめている。形式化とともに批判された形骸化の対応策として、客観主義を放棄し、日本を1つと考えることから生じている固定観念を相対化し、個別の地域の歴史形成過程の特質を明らかにすることを提起している。

新たな学会を作るにあたり、3つのキーワードでこれまでの民俗学で乗り越えるべきものを示したい。そのひとつは「尖鋭化」である。尖鋭化には「破壊」を伴う。最初から穏やかならざる言葉を出したが、20年前に福田氏は形式を整えるために陥った客観主義を放棄せよと言っているのも、当時の現代民俗学としての「破壊」の対象をそこに求めていたといえよう。私は当時の現代民俗学の克服すべき課題とされた客観主義と、アカデミズムに地位を確立するためのいわゆる形式主義の破壊を唱えた福田氏の提言を、破壊すべきであると考え。福田氏は方法論としてあやふやで民俗学と言えないころの初期の柳田の問題提起が社会に対して衝撃を与えたといっている。しかし、そういったことは現代の民俗学ではもはや動機付けとしての意義を認めるところにとどまる。むしろ、客観主義の具体例としてあげられている重出立証法や、比較の唯一の基準として示された周囲論の分かりやすさ、つまり他の学問分野から理解され、批判を受けたという点に注目したいのである。皮肉なことではあるが、こうした分かりやすい概念や方法論に代わるものを提出できなかったことが、民俗学は遅れた学問だという印象を生み出してきたわけである。それはそうしてこなかったプロの学者に責任がある。

ここで2番目のキーワードである「実質化」にふれることになる。これは従来、常識的なこととして説明されていなかったことを文字化する、つまりそれによって民俗学の内部のものが理解する助けとなるばかりでなく、他の分野の人びとが共通の概念、方法として利用できる助けともなる操作のことである。見方によっては操作であるから、実質化と言いながら実質は変える必要はない。千葉徳爾に『柳田国男を読む』があり、そこで千葉は「とかく世間では難解とか要領を得ぬとか、あるいは結論がないなどと評されるこの人の書いたものを、なるべく読みやすく説明してみようというだけの目的で書いたのである」とまえがきに記している。「レトリックや言葉づかい、また文体叙述の形などからみて、わかりにくい部分を含んだものを選んだ」とし、「清光館哀史」、「新たなる太陽」、「涕泣史談」など15の柳田の作品に原文を引いた後に解説を加えている。民俗学の研究は分析的というよりも記述的であるといわれるが、これなどは記述されたものをどういう筋道で理解に達することができるのかを示しているという点で「実質化」の1つの試みである。

「実質化」のもう1つの手法は対話である。1984年に出版された『共同討議 ハレ・ケ・ケ

ガレ』はそのよい例である。当時、討論参加者の1人であった宮田登は、従来のハレ・ケに加えて、ケガレを民俗学の基礎概念に定立させようと努めており、「この概念が、なぜ、現代民俗学上必要なのかということを考えなければならない」として、都市の民俗文化を考察する上で有効であることを力説している。これと近い立場の桜井徳太郎をはじめ参加者はそれぞれの見解を表明しており、主張の背景を含めた見解のずれが手に取るように分かる。ハレ・ケ・ケガレの概念の現実への適用限界も明らかとなっている。この討論会が高く評価されるのは、民俗学もひとつの分野に過ぎないと思われるほどの各分野の参加者の積極的な発言が、この概念の相互理解に資するところが大きかったといえる点にある。

このときの共同討論からも分かるように、重要なことは他の分野との概念の相互乗り入れである。民俗学の研究方法が記述的であるとしても、クリフォード・ギアツのいう「厚い記述」とどのように相違があるのか、社会学の「質的調査」とはどのような関係にあるのか、といった事柄を例としてあげることができる。最近盛んになっているドイツと日本の民俗学と民族学の理論的展開の検討においても、相互の理論的枠組みを歴史的生成過程を考慮して見ていくならば、相当の時間を要するであろう。

最後の概念の相互乗り入れに関連して、3番目のキーワードは「国際化」である。最近、日本民俗学会においても国際交流特別委員会の答申が出され、そこには「民俗学研究の進展をはかるためには、海外との積極的交流を推進する意思の存在は不可欠であり、本学会においてはそれを喚起することからはじめる必要がある」とし、「日本民俗学会は、欧米の民俗学会からは、ほとんど関心をもたれることはなく、世界的な民俗学界の動きから孤立している、あるいは取り残されている状態である」と現状を認識している。国際交流の具体的なあり方に関する処方箋も示されており、おそらく具体的に実行するならばそこに示された案のほかには考えつかないと思われるほど良くできた答申である。遅れているからやらなければならないと言う動機付けとしては、いかがなものかと思われる点があるが、確かに人類学会世界協議会のような国際的な組織に参画するという日本文化人類学会と同じ対応は取れないし、民俗学が各国ごとの政治、社会的情勢や人類学などとの関係性の下で進展してきた事情から、他の学問分野のような国際交流が盛んに行われてこなかったことも事実である。ヨーロッパの場合には関敬吾が指摘したように、比較が当たり前のように行われることが地域の前提としてあるのであって、「ヨーロッパ民俗学」としての協力関係の前提は、わが国の場合と相当な違いがあると考えなければならない。

国際化を考えると、戦後の民俗学が直江広治や大間知篤三のような戦前からの海外滞在調査者の跡を継ぐ人材を育ててこなかったことが、国際化に遅れを取っているという現状に結びついている。ようやく1970年代になって韓国、台湾や香港の現地調査が本格化したのであるが、その後も低調であったといえなくもない。国際共同研究の提案までしていた戦時中の民俗学の陰もなくなったといってよい。現代民俗学にとってアジアの、特に中国民俗を知ることは必須であるといえる。そこで注目したいことは、中華帝国の膨張する歴史、すなわち周辺の前住民族を漢化する過程で、文字を持たない人々の民俗を漢字に置き換える作業が行われてきたことである。その際に、民俗事象の概念化が行われているのである。このことは日本を含むアジアの諸民族に言えることであり、国際化の出発点のひとつとして考えておきたいことである。ヨーロッパの民俗学とは別の条件として、アジアでは文化的な覇権国家が長期にわたって勢力を維持してきたことが、現代民俗学の国際化においてまず考慮されなければならないのである。

以上のような3つのキーワードで示した現代民俗学の課題を、具体的に議論を巻き起こす起点としたいのである。そして、今後、プロの研究者集団として他の分野の研究者と伍していくようにしていきたい。

## 文献

上杉富之・松田睦彦編 2008『戦後民族学／民俗学の理論的展開—ドイツと日本を視野に一』成城大学民俗学研究所

ギアツ, クリフォード 1987 (1973)「厚い記述—文化の解釈学的理論をめざして—」『文化の解釈学 I』岩波書店

日本民俗学会 2007「国際交流特別委員会答申」『日本民俗学』252

桜井徳太郎・谷川健一・坪井洋文・宮田 登・波平恵美子 1984『共同討議 ハレ・ケ・ケガレ』青土社

千葉徳爾 1991『柳田国男を読む』東京堂出版

福田アジオ 1986「初期柳田国男の研究と現代民俗学」『思想』747